



プジョー407 SW 3.0で行く、オヤジのぶらり京都1泊フランス探しの旅。

いい車って何だろう、早ければいいのか？それとも沢山積める方がいいのか？話題となっているETC休日割引を利用した1泊ツーリングで検証する。車好きの間で常々話題となるいい車の定義。人それぞれ求めるものが違うので十人十色ではある。そこで認定中古車.comとしてのいい車を試してみようという企画、初回はプジョー407 SW 3.0を京都へ連れ出した。

京都といえば祇園というのが男の夢。辰巳神社横の新橋通り界隈の高級飲食店が軒を連ねる辺りを訪ねた。「都をどり」の提灯が情緒たっぷり。本来車で来るところではないが、それではプジョーがマッチしないかといえど。歴史のある通りだからこそ国は違うが色気のあるプジョー407SWが似合う。排他的と言われる町ではあるが、自分の立ち位置をはっきりしていれば自分は自分、貴方は貴方とフランス的な処方が通じそうな共通点がありそうだ。

街で注目されるボディデザイン

この車、デザインが素晴らしい。撮影をしていると人が注目している。通りすがりに眺めていく。スーパースポーツカーならともかく、ステーションワゴンボディをまとったフランス車がこんなに注目されるなんて意外だった。サイドから見るとグラマラスで全長4.775mmとは思えない伸びやかなデザインは近未来的。ルーフレールは取り外すことができてもかえって違和感を感じそうな程フィットし、SWという名称に相応しい。ガラスエリアの広さは驚くほど、万が一の転倒時に屋根が潰れないのか？不安になるほどだがそれこそルーミーな室内を提供する根源だ。

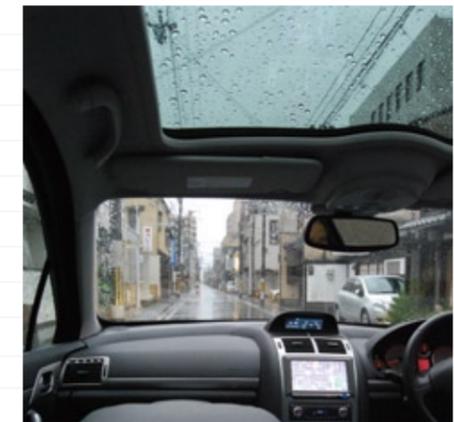
フロントに廻ればプジョーファミリーのアイデンティティがしっかり押し出されていて、少しでも自動車好きなら間違いようもないデザインだ。個人的には最近の308シリーズに採用されるようになったこのままモータースポーツに参加できるような大ぶりのエアスクープまがいのフロントグリルよりも好ましい。ロングドライブに出かけると、このテールゲートがガラスハッチだけ開けることができる設定ありがたい。定員乗車に近く乗ることの多い長距離ドライブでは、途中で荷物室

に入れたバッグから何かを取るという状況が多いのではないだろうか。そしてそれは大概暗い所でなくてはいけないことになる。そんな時にゲート全体がガバッと開いてしまうと予期せぬ何かを落としてしまうことがありそうで怖い。上半分だけであればその心配はかなり軽減される。もうこれだけで購入動機だ。

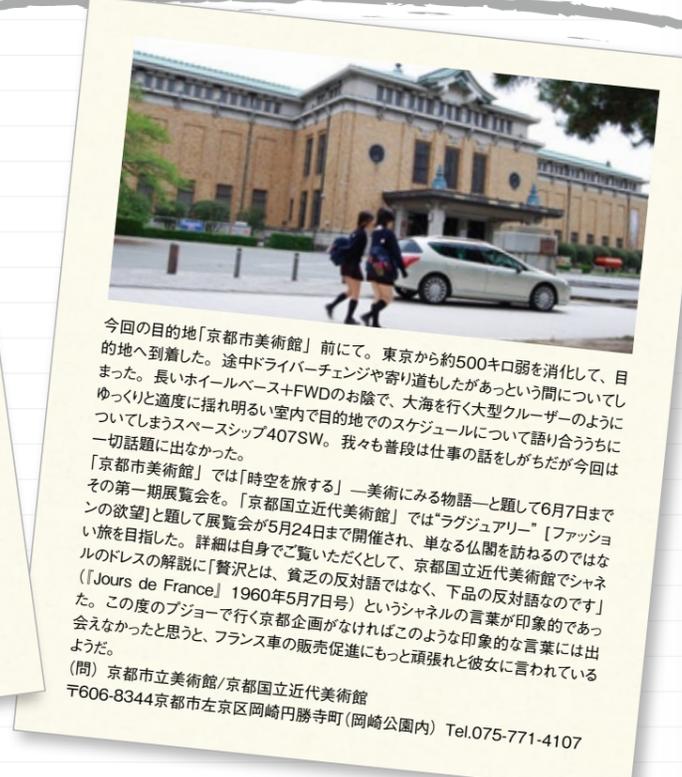
パノラミックガラスルーフは幸せを選ぶ

次にインテリア。運転席に座って気がつくのは広大なダッシュボード。フロントガラスが強く傾斜しているためにメーターナセルから前方が広く、これが逆にロングノーズの車に乗っている錯覚を呼ぶ。ロングノーズ・ショートデッキのスポーツカーにあこがれたジェネレーションには好ましく感じる。ボンネットの傾斜は強く直前の路面までよく見えるので狭い道での取り廻しが楽だ。操作系はフランス車と言えどもインターナショナル化が進んでいる。普段乗りなれている車と大きく配置などが変わることなく操作できる。もともとプジョー&シトロエンというようにフランス国内での部品の共用化は、どこかで見たようなグラフィックを使用しているのを同行したシトロエンオーナーは、見逃さ

なかった。しかし、何よりもこの車で声を大にして伝えなければならないのはパノラミックガラスルーフの素晴らしさだ。ひとたび車内に入って見上げる空の広さは電動シェードをあけている限り、もれなく太陽の恩恵に与る。一般のガラススライディングルーフに比べ3倍と思われる開口部から得られる解放感はこの車の性格をよく現わしている。ラテン民族が作ったバカンスに行くのを前提に如何に楽しくドライブするか？その答えこそパノラミックガラスルーフに集約されている。なかなかチャンスがないかもしれないリアシートが上席だろう。2725mmという長いホイールベースの中ほどに座り、フロントウイ



サービスエリアの鎮国が終わり、自動車を移動手段の中心にしている人には朗報だ。東名高速で中部・近畿地方へ向かう時になぜか最初の休息ポイントとなる富士川SA。このカットだけならば「オートルートでアメリカから進出してきたコーヒーショップの前で」というキャプションも可能だろう。自動販売機のコーヒーもずいぶん美味しくなっているが専門店にはやはり譲る部分がある。



今回の目的地「京都市美術館」前にて。東京から約500キロ弱を消化して、目的地へ到着した。途中ドライバーチェンジや寄り道もしたがあっという間についてしまった。長いホイールベース+FFDのお陰で、大海を行く大型クルーザーのようにゆっくりと適度に揺れ明るい室内で目的地でのスケジュールについて語り合ううちに一切話題に出なかった。我々も普段は仕事の話をしがちだが今回は「京都市美術館」では「時空を旅する」—美術にみる物語—と題して6月7日までその第一期展覧会を。「京都国立近代美術館」では「ラグジュアリー」【ファッションの欲望】と題して展覧会が5月24日まで開催され、単なる仏閣を訪ねるのではなく、い旅を目指した。詳細は自身でご覧いただくとして、京都国立近代美術館でシャネル（「Jours de France」1960年5月7日号）というシャネルの言葉が印象的であった。この度のプジョーで行く京都企画がなければこのような印象的な言葉には出会えなかったと思うと、フランス車の販売促進にもっと頑張れと彼女に言われている。（問）京都市立美術館/京都国立近代美術館 〒606-8344京都市左京区岡崎円勝寺町（岡崎公園内） Tel.075-771-4107



瀧・金沢・新潟・伏見と日本酒の産地は色々ある。そして、京都の水が旨いといふ耳にする。水が旨い酒だ。だからプランにもきちんと載せてある。1637年（寛永14年）、初代・大倉治右衛門が京都府南部の笠置町（現在の相楽郡笠置町）から城下町、宿場町としてにぎわっていた京都伏見に出て来て創業。屋号を「笠置屋」、酒銘を「玉の泉」としたのがはじまりで、1910年（明治43年）には「コップ付き小びん」が当時の鉄道省で「駅売りの酒」として採用され、月桂冠が広く知られるきっかけになったそう。もちろんこちらは日本酒造組合中央会の相談役をされる重鎮、古いばかりでなく益々もって社業盛んな企業。利き酒こそ出来なかったが（運転しない人はOK）お土産にコップ酒を頂き宿へ着いてから楽しく頂いた。（問）月桂冠大倉記念館 〒612-8660京都市伏見区南浜町247番地



風俗博物館と言っても私立博物館で、井筒法衣店という会社の5階にある。法衣店というのでやはり京都らしい業種だ。展示内容は定期的に変わるようなのでWebでチェックをお勧めする。ここで見たのは京都の貴族がどのように生活していたのか？という風俗である。本当はこちらのお店に興味がある。本当（問）〒600-8468 京都市下京区新花屋町通堀川東入（井筒法衣店5階） Tel.: 075-342-5345



どうしてもお伝えたくて、カメラマンに無理を言って撮影したのがこの写真。パノラミックガラスルーフの解放感は雨の日でも車内を明るく楽しくさせる。平安神宮の鳥居で叱られそうだがリアシートの住人にも素晴らしい景色を与えてくれる。日差しが強い時には電動サンシェードによって自由にコントロールが可能だ。今回の取材中は動作確認の他は常に全開であった。

ンドウからパノラミックルーフに至る雲や景色を眺めながらするドライブは、楽しい思いでのプラットホームだ。

ハイウェイクルーザー407SW

エンジンを掛け、セレクターをドライブに入れたらあとは流れに乗って目的地へ。大人が4人小旅行の荷物を詰め込んで1840mmのゆったりとした車幅を持つゆりの室内でリラックスして契約のタイムシェアリゾートへ行くような使いかたがピッタリ。V6 DOHC 3.0Lエンジンは主張せず、しかし必要にして十分なパワーが6ATを介して提供される。ステアリングは適度な反力をもたらす直進時には軽く指を添える程度でまっすぐに突き進む。高速道路で遭遇するつなぎ目や大きなバンプは直接的なキックバックではなくインフォメーションとしてドライバーに伝える。ポジションを助手席に換えれば、ヒップポイントが一般の乗用車に比べて高めに感じた。改めて車のサイドビューを確認するとドアの高さが低めに設定されているように見えるが、これは解放感に通じる。

しばらく助手席にいて忘れていたことを思

い出した。この感じは昔スーパーラグジュアリーなイタリア製クルーザーに乗せてもらった時の乗り心地に似ているのだ。どこか遠くで路面とタイヤのコンタクトは感じるが、それは知識として感じる程度で乗員は只々リラックスして会話を楽しんでいれば良い。これこそラテンではないだろうか？

旅を終えて

1泊2日で1000Kmをこなした、ロングドライブだったと思う。車を降りて大きく伸びをし

た時にどこか痛いとか、凝っているとかということもなく車庫を後にした自身に軽い驚きを覚えた。そして確信した。この車は人生を楽しむためにあるのだと。プジョー407 SW 3.0、いい車だ。

取材協力

プジョー・シトロエン・ジャポン株式会社
http://www.peugeot.co.jp/

プジョー407の認定中古車
最新情報はコチラ



古都の町家で食す トラディショナル系フレンチの新鮮さ

丸太町から二条城に寄ったところにそのレストランは在る。京の町家を改造した「レストラン パスカル ペニョ」、裏通りにひっそりと佇むその様はシェフの秘めたパッションを静かに封じ込めていた。外から見るとワインセラーとなっている蔵の真っ白な漆喰が眩しく、入口はきれいに掃き清められている。どんな方なのか楽しみで、暖簾をくぐった。オーナーシェフ パスカル ペニョ氏は現役のマラソンランナーだ。以前はトライアスロンもやられていたが、時間がなくてマラソンだけにしているそうだ。しかし最近では休みの日にご夫婦でカンファー道場へ通うのをレクリエーションにしているそうで、なかなかのスポーツマン。最初にした質問は私達がフランス料理と言われてどのようなものをイメージしたら良いのか聞いてみた。「皆さんがいつもイメージするパン・ワイン・チーズどれもが該当しますがそれにスープとソースを加えるとよろしい」そう、彼のイメージするのは本格的なフランス料理なのだ。それではあなたにとってのおふくろの味はどのようなのですか？「私は6人家族でしたから母親の作ってくれた羊のモモ肉の料理のように、大人数で分け合って食べられる料理が印象に残っています。夫婦二人っきりでこのような大きなポーションの料理を作ってしまうと何日もテーブルに上るので皆さん飽きてしまいます。私は大人数で育ったのでそのような事もなく育ちました」さて、フランス人でいらっしゃるわけですがプジョーとシトロエンではどちらがお好みで

すか。「プジョーです、シトロエンのサスペンションは私の好みより柔らか過ぎます。そしてデザインが好きです。去年フランスへ帰った時にパリからボルドー、モナコ、ブルゴーニュ、そしてパリまで4800キロもこの407SWで旅をしました。それは素晴らしい車でした。実はピニンファリーナのファンで406 クーペが特に好きです。607は一寸大きいし、307CCはお洒落ですね」と、クルマ好きなシェフです。さて代わって奥さまの恵さんにフランス人のインプレッションを伺いました。「フランス人は個性を大切にします。相手を認め合う、そして尊重しあうことができます。その生き方の中で自身の感性を大切にしています」ん〜、素晴らしい旦那さまということのようです。最後にソムリエとのことですので今回の魚にも合う、お勧めのワインを教えてください。「有機栽培のワインがお勧めです。取立て赤であれば魚なのでロワールがチャーミングで軽めで価格もお手頃です。」
(問) レストラン パスカル ペニョ
京都市中京区新町通夷川下る二条新町709-2
Tel. 075-211-9776



当日のランチメニューの一品。鯛のグリルに完熟でない酸っぱい葡萄のソースを添えて。ランチは比較的大きめのポーションでサーブされ、男でも十分満足のいくフランスっぽいお店です。



平安神宮は平安遷都1100年を記念して、明治28年に遷都のおや神様である第50代桓武天皇をご祭神として創建されたと、HPに書いてある。読み進むと京都復興の中心となり今の繁栄は平安神宮あってとある。そうであればフランス車もつと日本に広がるようにお願いしたいと考える。実際にはお参りができなかったが、今思うと心残りだ。